

雨 夜 の 星

雨夜の星

壺井 栄



角川小説新書

角川小説新書

雨夜の星



昭和三十六年九月十五日 初版発行

定価 貳百四拾円

著者 壺井 栄

発行者 角川 源義

印刷者 中内 あき子
東京都千代田区飯田町一ノ二三

発行所 株式会社 角川書店
東京都千代田区富士見町二ノ七

振替口座 東京 一九五二〇八番
電話九段四〇一二(代表)一五

(落丁・乱丁本はお取替いたします)

角川小説新書



雨夜の星
井 壺 栄

オルゴール

一

——女の子でございました。生れたのは七夕さまの夜でした。そんなことが、なぜか私の気持ちをずい分なごませてくれたように思います。太郎は大変残念がっておりますが、アカネは大よろこびで、味方を得たような顔をしています。いろいろと切ない思いを重ねたせいでしょうか、予定日より半月ほど早く生れてしまいました。親の方が落ちついていなかったもので、赤ん坊の方もおちおちしてはいられなかったのかもしれませんが。六百匁しかないのですよ。てのひらにのせるぐらいの小さな赤ちゃんです。太郎は九百匁、アカネは八百三十匁ありましたのに、六百匁の赤ん坊とは申しわけない気がいたしますが、産婆さんの言によりますと、これも時節柄のよしでございます。太郎やアカネの、生れながらムチムチしていたのを思い出して、あわれを催しますが、どういうのか泣声だけはまるで女丈夫を思わせるほどの元気で、ともすれば考えこみがちの母をばげましてくるようです。

小織という名前、いかがですか。

アカネと太郎が作った七夕さまの笹の葉のさやさと鳴るのをききながら、ふと考えついたので。来年の今日あたり、織女のように小織もお父さんにあえないかしらと思ったりして……

こんな手紙を、応召したばかりの戦地の夫に書きおくれたなつ子だった。これ以上の女々しさは人も我も許さぬ昭和十六年というはげしい時代に、なつ子は三人目の子の母となったのである。夫の留守に生れた子ということで、なつ子は小織がひとしおいとしかった。六百匁に足りないというかなしい体重も、早産とはいえ、いつとなく母体の飢になれたことを思い知らされて、はっとさせられたものだった。しかし、そんなおどろきも、あとのおどろきの大きさにくらべればもののかずではない。母乳のゆたかな体質のなつ子は、太郎もアカネも自分の乳で育ててきた。そして小織にも、その仕合せを続けることができ、ある母乳で小織はみるみるうちに、これがあの子かと思うほどの成長ぶりだった。ちょうど前後して生れた近所の男の子に、毎日一度ずつすそ分けするほどの乳の出で、勝男ちゃんというその男の子の母は、それを恩にきながらも、口ぐせのように羨やましがってばかりいた。

「小織ちゃんは、仕合せねえ。ほんとに」そんな言葉を正直にうけとっていたなつ子も、日とともにある不安が芽を出し、そして次第に枝をはってくるのをどうしようもなかった。

「もう見えるんですよ」

自慢らしくそういつてわが子をあやす勝男の母に、なつ子はいいいやうのないいら立たしさと不安を、かき立てられた。どんなにあやしても、小織の瞳が動かないのだ。

「女の子のくせに、愛嬌のない子やのう」

と祖母の松枝が眉根をよせるのもなつ子にとってはつらかった。三度に一度は、小織に味方して、「笑いとうもないときに、そそのかされて無理々々笑わされるなんて、いやよね小織ちゃん」

しかし、眠っているときなどの小織の笑顔の可愛らしさを思うと、やはり不安はきりはなせない。なつ子は、太郎やアカネの時の育児日記をくつてみた。一か月を過ぎると太郎もアカネも母の顔を凝視している。五十日前後になると、あやせばそれにこたえて笑っていることが記録してある。百日たったころには、人の動きに目をつけて顔を動かしているのだ。ことに母親のなつ子に対してよく笑っている。

ところが小織は、もう四か月というのに、なつ子の顔を見ようとしない。見えないのだろうか。

「小織ちゃん！ 小織ちゃん！」

必死になってよびかけながら、小織の目の前に顔をよせ、右に左に動いてみせても、小織は時たま笑うだけで、しまいにはまるで大人っぽい恥らいをみせるかのようにうつむいて、しかも泣きべその顔になってしまう。

——あせっちゃあいけない。赤ん坊の神経をいらだたせては、神経質な子になってしまう。おちついて、おつとりと育てなくちゃあ……

そうは思ってみても、わずかに一度、乳をわけてのませるだけのなつ子にさえなついて、日毎に愛嬌をふりまく勝男ちゃんをみては、じっとしてもいられなくなる。わざと視線をはずしていても、まるで大人の意をむかえるように、なつ子をみてさえ、わけのわからぬ赤ん坊語で話しかけてくる勝男ちゃんが、大人気なくなつ子には憎らしくなったりする。

若い勝男ちゃんの母の雪枝は、そんなことには気づかぬ人の好きで、はじめての男の子にうつつをぬかしている。

「勝男ちゃん、笑って。ここよ。ほらほら。ばあ！」

などと勝男ちゃんの顔の先で手を叩いてあやすのだ。その度に勝男ちゃんは危なっかしくまたたきをする。それがまた面白いといってその母は夢中である。

「赤ん坊って、いち日相手になっても、面白くてあきることがないですね」
そういわれると三人の子持ちのなつ子は、

「そうね」

と答えずにいられない。すると雪枝はいい気になって、

「毎日、なんとなく、少しずつでも進歩していくんですもの」

「あたりまえよ、奥さん」

なつ子はいふき出し、

「赤ん坊が、いつまでもおんなじ赤ん坊だったら、大変じゃありませんか」

「だって、あんまりはつきりしてるんですもの。ね、昨日までは、あやされて仕方なく、ただじいっこっちをみつめていたのが、今日になると自分の方から見つけるんですもの」

「そうね」

にがっぽくこたえるなつ子に、気のつかぬ雪枝は念をいれて、

「うちの坊やって、少し早いんでしょうか。もう目をつけるんですよ。坊や、こっちよ、ほら、ほら、ばあ！」

わが子をなつ子の膝にあずけたまま、右へ左へと、大きくからだを動かして、勝男の視力をほこった。なつ子は仕方なく苦笑し、

「それが、親馬鹿というもののなのよ。私もアカネの時はそうでしたわ。太郎のときは男の子でしょ。家中が親馬鹿になってしまつて、あけてもくれても、はいはいいつてたわ。赤ん坊にとっちゃあ、めいわく至極しごくなんですよ。だから小織は、ねるだけねかせておく方針なの。ひとりで這はい出してくるまでね」
そのくせなつ子は、雪枝が帰っていくと、待ちかねたように、ねせてある小織のそばに顔を近づけていつて、

「小織ちゃん」

と、そのやわらかい頬ほをつつついてあやした。さわらないと、小織は笑わないことを、なつ子はなんとなく感じていた。

「小織ちゃん、小織ちゃん」

ガラガラをとつてふつてみせたが、小織の関心はその音の方にあることしか感じさせない。

「くらいから、みえないの。じゃあ、だっこして、日向ひなたぼっこさしたげる」

広縁ひろえんの硝子戸ガラスドを立てて風をふせぎ、おしめをとりかえるついでに、なつ子は赤ん坊をはだかにしてやった。秋の午後の日ざしはサンルームのように部屋にみちて、その光りの中で小織はうーんと手足をのびしながら目だけは閉じたまま開けようとしなない。

「どうしたのよ、小織ちゃん、お目々をあけてみせてよ」

なつ子は近々と顔をよせて、小織のまぶたに見入った。こころもちくぼんだような、やせたまぶたが、気になる。じっと見つめていたなつ子は、いきなり抱きあげて、わざと小織の顔を日向ひなたにさらしてみた。小織は閉じたまぶたに一そう力をいれ、大人のように眉まゆをよせる。

——まぶしいのかしら……

防空の黒い幕をさつと引きよせて、その暗いかげによせると、小織は老人のように、ほうっ！ とためいきをして眉をひらく。だがまぶたはやはり閉じたままだ。

——ただごとじゃないわ。目が、悪いのかしら……

遠いところのものを見極めでもするように、なつ子はじつと目をすえていた。そうとしか思えない。昼間はいつだって小織は目を閉じて、うなだれている。夜になって、はじめて目をあける小織なのだ。あけてはいるが、それも見えているかどうかはわからない。

——一度、医者に見てもらおう……

さつと血のひいていく思いで、手早く着物をきせたのも、どこかでサイレンが鳴り出したからだ。

——訓練警戒警報発令！

女のかなきりこえが聞えてくる。押入れの中の防空壕に小織をひとりねかせておいて、なつ子は防空頭巾をかぶり、いざとなればいつでもとび出せる身仕度をしながら、夫の哲夫のことを、はげしく思い出した。いったきり、何の便りもない哲夫に、なつ子は呼びかけずにいられない。

——小織が、大変なのよ！ 早く帰って、哲夫さん。

そんななつ子の思いをよそに、押入れの中の小織は何のくったくもなげにすやすやとねむっている。

二

アカネや太郎をねかしてからのことであった。

「ねええ、おばあちゃん、おばあちゃんはどよう思いますか小織の目。少しへんだと思いませんか？」
姑の松枝に、思いきつてたずねるなつ子の目は喰い入るように光っていた。

「そんなことお前——」

そういわれたことでほっとしながら、しかしそれで安心するわけにもゆかず、なつ子はまたいった。

「だって、ちっとも、こっちの顔、みようともしないでしょ。そう思いませんか？」

すると松枝は、さっと不安を、顔じゅうにみなぎらせて、

「そういえば、そんなところもあるようだがね、しかし、見えないなんてことは、ないじゃろう」

「そうですかしら」

「だって、晩になると、じっと電気の方を見ているよ。こないだも、私が電気を消してみたら、泣き出したものね。いそいでつけたら、すぐだまって、じっとみていたもの」

なつ子ははっとした。やっぱり姑も、何となく心配で小織の目をためていたのか。そうとわかると、なつ子の気持は少しらしくなり、昨日、姑にだまって近所のかかりつけの医者（いしや）にみてもらったことを、話す気になった。内科、小児科、外科、眼科と、ひとりで手をひろげている古谷医師は、つけたりのような眼科を恥じるように、洗眼もしないで、いったのだ。

「これは、私の手にはおえませんね。もしかしたら、小眼球というのかもしれないよ。一度、専門医にみてもらうことを、おすすめしますね」

なつ子はどきっとしながら、

「小眼球って、どういうのでしょうか」

「そうですね」

それだけで、それ以上を語らぬ古谷医師に、ショックを感じながら、なつ子はだまってひきさがった。大変なことに、ちがいないとさとしたのだ。そしてその夜はまんじりともせず、夫にながい手紙をかいた。しかし、朝になると手紙を出すことさえもさしひかえたくなった。戦地の夫によけいな心配を、かけさせなくなかったからだ。しかし、ひとりで胸にたたんでおくことではない。

「実はねおばあちゃん、相談しないで悪かったんですけど、私、きのう古谷先生とこで、みていただいたんですよ」

「そしたら？」

松枝は一ひざのり出し、なつ子におとらぬはげしい目をした。

「専門のお医者に見てもらえって」

「……………」

松枝は声をのんでいる。

「むつかしくて、古谷さんの手にはおえないらしいのよ」

なつ子は、一生けんめい、波立つ思いをおさえていった。それでも声はふるえていた。だまっているだけに、松枝の嘆きがなつ子の胸に伝わってくる。放心したように畳をみつめている松枝を、なつ子はなぐさめねばならなかった。

「でも、今日の医学ですもの。なおりますわよ、おばあちゃん。私たちの真心でも、なおしてやりましょうね。しっかりしましょうね、おばあちゃん」

だが、すっかりちゃんと胸をはってみたところで、真心だけではどうなるものでもない。小織は相変らず光りをおそれて眉根をよせ、曇り日や夜だけ、細く目をあけている。普通ならばもうはいはい出来る時期になったが、小織はそれをしない。はいはいの目標が立たないからだろうか。母親にむかつて、きょうだいにむかつて、おもちゃやたべものや、そのほか目に映るすべてのものにむかつて、はいはいの赤ん坊は気をあせり、やがて目標にむかつて突進する。その意欲を養う目が、小織にはないのだ。

「小織ちゃん、いらっしやい」

わざとはなれて手を出しても、小織はからだをゆり動かすだけで、一しよにうちふっている手は、ただ喜びを現わしているだけなのだ。

「小織ちゃん。はい。うまうま」

ビスケットを目の前でちらちらさせても、わからない。だが、もたせてやれば、押しつぶすほどの強い力でにぎりしめてはなさない。

「お母ちゃん、小織、目が見えないの」

アカネが不審をもち出したころには、なつ子はもう、通うに可能な限りの眼科医を訪ね廻っていた。先天性白内障というのが、小織の持って生れた病名だった。

「もう少し大きくなってから、手術でもしてみますか」

あまりにたよりない小さな赤ん坊をみると、どの医者も、同じようなことをいった。

「手術って申しますと、どんなことをするのでしょうか」

なつ子が、一足ふみこむようにしてきくと、

「濁った水晶体を、きって出すのです」
 こともなげにいう。

「あの、メスをいれるのでしょうか」

「そりゃあそうです。つまり、分りよくいえば、元来透明であるべき水晶体が、この赤ちゃんのはすり硝子のように濁って、視神経のじゃまをしているんですね。それをとりのければ見えるというわけですね」

いともかんたんにそういわれると、なつ子はほっと胸をなで下したが、別の医者はまた別のことをいう。「そりゃあね、うまくいった場合のことですよ。そう窓をあけて外を眺めるような具合には、なかなかいかないですからね。ただ、しないよりは、もちろん手術した方がよいにきまっていますのです。まあ、三四年様子を見て、なさるといいですね」

楽観は許されない。それに、何よりもじっとしていられないことは、あと三四年をまつことである。その間、だまって待っているよりほか、手だてはないものだろうか。

なつ子は、あらゆるつてを求めて、名医の門をたく決心をした。

「そんなに、ひとりでやきやきしたって、どうなる。時期をまでというなら、ともかくまちなさいや。三年や五年はすぐたってしまふから」

松枝が落ちつかせようとすると、なつ子は泣いてたのんだ。

「おばあちゃん、ほかににも申しませんから、するだけのこと、さして下さい。みんなのお医者に、さじをなげられても、やっぱり私は、お医者をさがしてやるつもりなんです。お父ちゃんが帰ってきた

とき、この子ひとりお父ちゃんの顔がわからないなんて、かわいそうじゃありませんか。……」

なつ子は声をあげて泣いた。すると、そのとき、もう一と誕生の近づいていた小織はもらい泣きをした。

「いいのよ、いいのよ小織ちゃん。さあ、おかあちゃんとまたお医者さまへ、いこうね。早くお目々がなおるようにみてもらってこようね」

戦局は太平洋に移り、一度は敵機てうきの来襲らいしゅうもうけた東京の町は、ものものしいでたちの人々が、身がまえているような毎日だった。防空服装に身をかためたなつ子は、小織のための防空頭巾をもって、医者通いをした。八人目に出あった若い代田しろたという眼科医は、なつ子の熱意を受入れたのか、それともそれをはじめからの信念なのか、くわしく診察もし、話もきいた上で、

「いたしましょう。一度で失敗すれば二度、二度でだめなら三度もすればよいでしょう。それで眼鏡かけりゃあ、見えるようになりますよ。なりますとも。視神経おとが衰おとろえない中に、やった方がいいでしょう」

「眼鏡ですって。あの、こんな赤ん坊が、めがねかけるのでしょうか」
すると代田医師はからから笑い、

「いや、そりゃあまあ、学校にでもいき出してからのことですがね。いずれめがねは、どうしてもかけなくちゃあ、よくみえないですからね。学校で習われたでしょう。凸とつレンズのようになってる水晶体のこと。それをとりのけるのですから、水晶体に代る凸レンズの眼鏡をかけなくちゃあ、遠くが見えないという、わけですがね」

「わかりました。ありがとうございます」

なつ子は床にひざまずいて、涙を流した。見えなかった自分の目が、はじめて見えたよううれしさだった。

代田医院を出ると、防空演習の警報が鳴り出した。まだ警戒警報だった、なつ子は駅の方へ走っていきながら、

「小織ちゃん、よかったね。よかったね」

そして道ばたのおもちゃ屋の看板のある店へ、それがはじめからの目的でもあったように、はいっていった。もうなにもかも、おもちゃらしいものの姿は消えてしまっているのに、どういうわけか、セルロイドのオルゴールが二つ、ほこりをかぶって、棚の上にのっていた。はじめは鮮やかな色どりであったろうに、ながいこと棚にさらされてそのあせてしまったオルゴールを、

「これ、下さいな」

手にとると、昔だけはかわいらしく、ころんころんとなる。小織がよろこんで、からだをゆさぶった。

「それだけじゃあ、困るんですがね」

頭のはげたおもちゃ屋の主人は、粗末な切糞を束ねたタワシを抱き合せた。それでよければ、十円だという。十円あればやみの米が買える。かしなつ子はためらわずにそれを買った。小織のために、よい芽が出そうに思え、その前祝いのつもりであった。

——訓練空襲警報発令——

メガホンをもって走ってゆく男がいた。オルゴールの縁で、警報がとけるまで、なつ子はおもちゃ屋の